

## 島田清次郎未定稿翻刻 II

The Reprinting of Unfinished  
Manuscripts by Seijiro Shimada II

小林 輝 治

前回に引きつづき、清次郎が残した「保養院」時代の草稿から、さらに二編を選んで翻刻、新たに幾つかの問題を考えてみたい。

その一編「煙」は、清次郎とわずか四か月ではあったが世帯をもった小林豊とよをモデルにした短編である。豊は、大正十一年一月から清次郎と新婚生活を始めるが、姑との間もはかばかしくなく、彼の激しい嫉妬心にもほとほと疲れ、山形の実家へ帰ったといわれている。それは、第一次世界大戦後の欧米視察を目的として、彼が外遊（大11・4―12）に旅立ってまもなくのことで、当時既に、清次郎の子良輔りようすけ（大11・12・7生／昭20・8・15没）を宿していたが、それにもかかわらず、豊は一方的にこの結婚を破棄したのであった。したがって周知のように、極端に自尊心の強かった清次郎は、生涯豊を許すことができず、わが子良輔についても自分の子としての認知を行なおうとはしなかった。その間の、いわば深い憎しみをモチー

フとして生まれたのが、この「煙」であったと考えられよう。

この題もツルゲネーフ（彼は「ツルゲネーフ」の小説から取ったことを冒頭でことわり、あとで改めて、豊のみならずその兄相象（しかも兄について）までを引き合いに出して「君等は生涯を煙りにしてしまったコークスみたいな畜生」だと罵倒、もっと象徴的な意味をそこにこめようとしている。それは不正不義、いわば罪悪というものの、いかに空しく愚かしいかということであろう。その間『カルメン』の劇中歌「煙草のめのめ」がきわめて巧みに取りこまれてもいる。

もっとも、いくら未定稿であるとはいえ「部落の者共」云々という全く不当な差別表現があり、また「美人局」を働いたとして、女を縛り上げる場面にしても、主人公の元慶大教授村山法学士の「この婆あ犬め／海老えびにしてやる」「彼れは、ふんじばった獣女の背を

どかんと足でふまえて」云々は、あまりにも粗悪、粗暴な表現である。しかし「保養所」とはいえ、実際には「収容所」的なその性格や、まして一時的錯乱から既に正気にもどっていたにもかかわらず、それが少しも認められないで放置されていたのだとすればどうか。そこにはもう少し弁護の余地があつていいのではないかと思われる。が、いずれにしても、この草稿から清次郎が狂人だったという印象をもつことはむずかしい。この事は、次の一編「縁」においても同様である。

テーマ・ストーリーは勿論、文脈・語彙・漢字に至るまで、未定稿段階ということを考えれば全く問題はない。

主題は、文字通り「出会い」というものの不思議を考えさせるものである。

筋も三年余の外遊から帰った社会運動家野島民造が、八千代子という女と再会、この女との関係を軸に展開する。その間、自分にとっては「思想上の母」ともいふべき存在だとして十年ぶりに会った暁烏敏のこと、さらには無政府主義者大杉栄とその妻伊藤野枝とのことを淡々と語り、人生の「縁」のいかにミステリアスであるかを述べて終わっている。

しかも、清次郎の最晩年に当って、自分の思想形成上最も影響を与えた人物として暁烏を挙げていることは、彼と浄土真宗との関わりを見る上からもきわめて興味深い事実であろう。

さらに注目すべきは、この稿の終わりに書きこまれた日付が「一九二五年五月十日」となっていることである。ということは、先の「煙」も「縁」と同じノットに書かれていることから、いずれも、

「保養院」に強制収容された大正十三年七月から、恐らくはまだ一年もたたない頃に執筆されたものとの推定が成り立つ。したがって五年九か月（大13・7・31―昭5・4・29）狂人として「保養院」で過ごし死んだとされている通説には、どうしても従えないという問題が出てくるわけである。

なお「地上」第一部以来見られる社会改造への志向は、この二作においても依然として衰えず、その変わりなき執念にはまたまた驚きを禁じ得ない。

終わりに、翻刻の際、とくに留意した緒点について述べておく。

① 漢字、かなづかい等の明らかな誤りについては、その横に「ママ」を付す。ただし、あとで漢字を入れようとして先にルビを付したものの、及び名前をあとで入れようとして空欄としたものについては□を、さらに破損があつたり消えていたりしてきわめて判読のむずかしいものについては、その字相当分を「X」で示しておいた。

② また、横へ補正するなどして、誤って直前の助詞等を重用したもののについては、その不用のものに「」を付した。逆に重用ではなく脱落させたと見られるものについては、その落ちたと見られるものを△▽をもって補った。

③ さらに、漢字のうち現在施行されている「常用漢字表」にあるものは、その字体によって統一した。

煙けなり。(小説)

嶋 田 清 次 郎

(亜米利加を訪ねた時、桑港で小島鳥水氏にお目にかゝって、同氏の家庭を拝見したが、ロシアの文豪十九世紀初頭に於けるツルゲネーフの真筆蹟を見ることが、できた。この小説の題の「煙」はツルゲネーフのローマンス「煙」をとってきたものであることをおことはりしてをきます。)

## 一、

少し大がかりな創作の仕事をもって大磯王城山の麓の別荘にこもってゐた、前慶大教授の村山は、一千九百二十一年の暮れ近い、うっそりと気味の悪い曇り日マヤを、幸ひ日曜だったので、原町の友達の黒田を訪ねた。

村山が学長としてようとつして塾を退いた後ちも、辛抱して踏み止ってゐる生物学教授の黒田は、最近結婚したばかりのせいだったか、折りよく家にゐてくれた。

「どうしたのかと思つて心配してゐた。塾でもよく君の噂をして何かの機会に、君が塾へかへつてくれることをみなが希望してゐるのだ。まあ上りたまへ。」

汚れてはいるが、掃除のゆきとゞいた書斎マヤへ、村山をとほして、

荊島初冬の松の木の多い築山や池の風致を具へた黒田の自慢の庭園のみえる、硝子戸を明けはなした。村山は辞職以来の挨拶や、黒田の結婚祝ひといふわけではなかったが携えてきた心ばかりの贈り物を、極く内気な彼れの前に、顔をあげるのも面映ゆげな黒田の新妻に差し出した。

「お噂はきいてゐます。ようこそおたづね下さいました。」

村山と同席して、郷里を同じくし、大学を同じくした司法官試補の加野が、青年らしい面に血の色を見せてうそ寒い一日暇の一日を同郷先輩の間にあるのがうれしくてならないやうに始終にこにこしているマヤのだった。

「塾を止めてから、仕方がないから少し大がかりな創作にとりかゝつてゐる。それが完成したらしばらく倫敦大学へ、経済学の研究にゆこうと思つてゐる。」

「君の受持つていた経済原論の講座は、予科の教授だった田野君が一時、代つて受持つてゐるやうだ。——さう、創作の方へ一時専念になれば、君の道楽もとうとうものになつたといふものだ。」

黒田は×××顔容只気節ある村山の成功をうれしむやうに微笑むのだった。

「とにかく、僕等は経済学者としての君は勿論だが、作家としての君の将来に大きな前途をみてゐるマヤのだから、——ことに君の欧羅巴への旅には大賛成だ。日本の非文明にあきたらない現状打破論客の君がヨーロッパへゆくのなら、ツルゲネーフ位の仕事を僕らは期待してもいいだらう。」

そして三人の話題は、楽しい気のマヤをけない同郷人同志の雑談には

いった。それは時計のセコンドの刻みにも焦燥せねばならぬ青年学徒にとつてのわづかな息ぬきの時間だった。同じ風土に育ったものの、相互に認め合ふ優越の感じ、先輩は後輩を引きあげ、後輩は先輩を支持する協力の精神が、そこにみなぎっていた。話題はロシアの文学にうつった。

「原さんの我々国民への遺産の一つである倍審制度が実施されるやうになったのは、僕等もいゝことだとは考へていますが、善良な市民が×人よつた寄つた幻で、いはゆる悪人として世間に知られてゐる、善良な悪人、以外、世間に知られていないほんとうの悪人にかゝつては、倍審制度も裁判官も、どうにも仕様のないものと、僕等はよく、役所で話してゐます。トルストイの言ふやうに、人間が人間を裁くことは不合理で、不可能でせうけれど、女といふ女がカチューシャのやうに可憐な娘であるといふわけではないでせうし、トルストイとは異つた意味で、人間が全能でない限り、ほんとうの悪人をどう裁いていゝかは全く不可能のやうに思ふことがあります。そしてその立場からいへば、トルストイと正反対に死刑は××的である、死刑がなくては人間の悪を防止することが出来ぬといふ刑法学上の議論が正義だと信じられます。——尤も、厳正なる審判といふことは、天才にまつよりほかに仕方のないことだと思ひますが。」

「トルストイの主張は、近代の道德倫理の上からいへば、一種の個人主義的無政府主義で極めて低い程度のもので、悪人を罰するに死をもつて少くともすることは、動物学的実験の上からみても、合理的だ。——事実、人類中のライ毒菌である不倫不逞の悪人は死

刑にするよりほかに仕方のないものだ。現に我々の身体細胞内の白血球は結核菌や梅毒菌を刻々に、殺しつゝ生きているのだから。類進化といつては、少し広汎すぎるならば、国家社会の進化のためには、死刑は必須の手段であるのだ。これは、生物学上の科学的見地からみても肯定できる正義の主張なんだ。フランス革命のギロチンや、労農ロシアのスパイ死刑や、アメリカ南部に於ける黒奴私刑のごときも亦、科学的進化論の立場からは認められると同時に、刑法学上の死刑存続論も必要であり、必然であり、これなくては、トルストイのいはゆる「人間が人間を裁けるかどうか」以前に、「人間の眼をくまます悪人を脅威せしめ、悪事を未然に防止し得るかどうか」の問題を解決するわけにゆかないのだ。——もう一步すすめていへば、一口に人類といふけれど、現代では、××に生物学的状态に於ける'Mankind'といふ類別をもつて一つに言ふことは出来ないで、優越なるものの道德をもつて、とうてい向上するか、又は××するか、どっちにもなり得ないで、正当なる代価を支払はずして、優越者の享樂的部分だけを奪略しようとする梅毒菌を、絶滅せしめることは、正義どころか、生物学的義務なのです。」

黒田は少し紅潮して、穏やかな体容のうちに秘めてゐる、明晰な頭脳のひらめきをみせた。そして、村山が、あくまで、現代の腐つた風潮に対して徹底的にProtestであることを熱望するのだった。

「大事業は大いその人が、最も孤独なる時にachieveするものだ。」と村山の一時的な逆境を励激した。

「ドストエフスキイが、罪と罰、の罪だけを書いて、罰を書かなかったのは実に惜しいと思ふ。」と、村山は見当ちがいのやうな

彼れの激励にこたへた。しかし、黒田や加野の正義論には勿論異存はなかった。

午餐を共にした村山はその日一日、黒田の家庭で楽しくして、薄暗らくなった頃、加野と二人で外へ出た。二人とも実にしばらくぶりだったので、このまゝで別れる気がしなかった。彼れは東京へ出て、遅くなった時、いつも泊まることにしている、学生時代から知合の家でその夜もゆっくり休むつもりだった。

「加野、今夜、もしよかったら、つきあはないか。」村山は、少し、学生時代の豪放さにかへって、彼れ×信頼してくるやうな若い加野をかへりみた。

## 二、

ゆきなれたその家では、「柳川」の料理か何かで、彼れがいつも後輩の青年をつれてゆくように、何くれとなくゆきとゝいたもてなしをしないではおかなかった。ことに、彼れの好きな、上品で、艶やかな、江戸ッ子の小春が、彼れと加野の間をとりもつのだった。「こちらは司法省へつとめていらっしゃるの。畏いわねえ。」

「畏いことがあるものか、僕達がいるんで、君等もこうして命があつて、その日を暮らしてゆけるのではないか。」

加野は、初気な学生が世間へ出たてのフランクさで、快活らしく振るまつた。

村山は、盃をふくんで、小春がときどき「初心な坊っちゃん」のやうな加野をなぶりさうにするのをたしなめ乍ら、加野の高等学校

時代のことを考へてみた。中学を出て一高の試験に落第した彼れは一年おくれて四高の試験へはいったのだった。四高卒業間際の頃、市街の高台の練兵場の通りに、一人のアメリカの婦人が聖書の講義を毎週日曜の朝、ひらいていた。知識欲に燃えた高等学校の学生は、耶蘇の教えの何んであるかさへ考へてもみずに、西洋の婦人に接する好奇心や、生きた英語の会話ができる研究心から、誘ひあはせて、枯れた秋草の茂った高台の鎧戸のひらいたみす・てつとろの西洋館へ通った。父を成功したる羽二重機業主にもつ加野は、他の単に好奇心や English の上達が目的の連中とちがって、ことに信心深い基督教徒だといふ評判でもあり、さうらしく見えてゐた。——彼れは先輩の中橋徳五郎氏の生家である土塀の長くつゞいた高台の家の表通りを、加野と二人で歩きながら、みす・てつとろの講義した、ノアの洪水のことについて話した記憶をもっていた。

「アメリカ。」さういつて、彼れは右手をあげてピストルでこめかみをうつ真似をしてみせたが、クリスチャンでこりかたまって小説一つ読んだことのない加野には、彼れが、罪と罰の一節をしやれてみせたのが分らないらしかつた。

「いや、ありがとう、僕は酒はあまりのめないのですから。」などゝいつて、小春のながしめに萎すくめられて、あまり強くもない酒に、酔ひかけた善良な青年の加野を、彼れは、むかしと少しも変りがないなど、眺めていた。

「おい、役所の様子はどんなのだい。僕なんか、いつ訊問にあづかるか分らないからその時は、宜しく頼んでおくよ。」

「役所はいたつて閑で、小春日和の暖かい日が、いつも×××××

×の赤煉瓦の地方裁判所の薄暗い構内へ射<sup>マヤ</sup>ています。僕等はいたって穏やかな毎日を、至極のんきに、退屈にくらしてゐます。」

「それなら、今夜は、久しぶりにゆっくり呑みあかさう。」と、村山も腰をすえて、小春の酌でのみ出した。

「さうお、司法省へ出ていらっしゃる方なの。畏いわねえ。」と、四五人のお酌達は小春にならって、加野の周囲をとりまいてもてなした。

治 輝 林 小

「僕は、村山君、いたって、善良な、クリスチャンとして、人もゆるし、自分もさう信じている<sup>マヤ</sup>のだが、此の頃全く、どうにもこうにもならない、苦しい一つの<sup>マヤ</sup>sceneに苦しんでいるのです。」細い鈍い瞳をむしる無気味な位る真面目な光りですえ乍ら、加野は村山の前に一切を告白しはじめた。「最初は僕が悪かったのかもかもしれません。しかし、僕丈が悪くは限らないと思ひます。今年の未だ九月の学校では日本中休暇がやうやく始業はじめのあった頃だと思ひます。私は牛込の同じ司法省へつとめて部屋を同じくしてゐる司法事務官で、山形県出身の辻本君の処へ遊びにゆきました。刑法学上の新進学者でもあるのです。私とはか二三人の同僚と遊びにいったものですが、ラッパの大きな蓄音器で、端唄や何かをきかされたのですが、その時、辻本君の家に寄宿してゐる何んでも辻本君の出身地の鶴岡から一つ彼方の国で羽前大山といふ僻遠の土地の出生で、その頃神田の職業学校へ通<sup>マヤ</sup>っていた女学生で、<sup>(6)</sup>といふ女と知り合ひになりました。話の模様では、同じクリスチャンで、文学などが好きであつて、話してみると、案外に話が合ふので、私は自分のアドレスをのこしてかへつてきました。それを機会に、園枝

は私の下宿へ度々訪ねてくるようになりましたが、村山さん、羞づかしいことですが、私は、その女と関係してしまつたのです。」

「ふむ。」村山はまたいつものよく世の中へ出たての青年の一種の功名話しかとうっかりしてきいてゐた。

「ところが、この頃、その女は、私の子供をはらんだといつてすわりこんできてゐるのです。」

「君はいったいどの程度でその女と接触したのだ。」

「ほんの二三度です。——」

「処女だったのか、それとも——いったいどういふ女なのだ。」村山は少し問題を重大らしく考へてきき訊した。

「嫌なお話にならない女です。Old duck<sup>(7)</sup>です。背の低い、廃類なフニヤ<sup>マヤ</sup>くの、ゆがんだカニみたいな女です。私はその女の地獄へ引きづりこむやうな、消えいるやうな、虫の息のやうな、哀れっぽい声にだまされて、その女の醜婦であることや、つかむ<sup>マヤ</sup>だ腕のザラ<sup>(8)</sup>と絞膚であることや、髪の毛の女乞食のやうにちぢれつ毛で、皮膚に光沢<sup>マヤ</sup>がなくなつたんで瘡<sup>(8)</sup>せはそつてゐることや、腰骨が太く広くて、肉身がだぶだぶで、瘡<sup>(8)</sup>たやうにがらがらの×××であることを忘れていたのです。処女だの処女でないの、といふ問題ではないのです。もちろんさういふ方をよせつけた私が悪いのです。——さういふわけで私はその女が自分の子供を胎ませたとはどうしても、信ずるわけにゆかないのです。ことに、この頃、私が、この女が宿へ訪ねてくることを拒絶してからといふものは、その女の実兄だといふ、<sup>(9)</sup>相象とか何んとかいふ恐ろしい名前の、同じ頹廢的なアメリカ西海岸へ十七年労働にいつていたといふ、瘡<sup>(8)</sup>せ衰へたあらゆる×

血をしぼりつくされ、悪事といふ悪事をしつくしたやうな×びた、陰鬱な男が、その女を時勢おくれのけばけばしい衣裳をつけさせて、二人で揃って、僕の家へやってきて、私につきまとふのです。——つまり、そいつらの言ひ分では、身重になったその女と一日も早く、正式に戸籍を入れて結婚しろ、それでなければ、出産病院へ入れなければ、ならぬから、金を出せといふて、脅迫しているのです。——「その司法事務官の辻本君に、未だ相談しないのか」と村山はすわりなほしてきいた。

「さういふ話を、君毎日、同じ部屋に卓子をはさんで事務をとっている先輩に話されやしない。君だから、どうしたらいいか分らないので、御相談するのです。」

村山はしばらく考へていた。「——その女は、もしや、哀れっぽい、この世の終りが近づいたやうな声で、近頃はやっている、船頭の唄、や、一昔前にはやった、今度生れたらロバにのっておいで、ロバはよいもの市場へもって行って、可愛い女とねてくらそいか、いふイヤな歌をうたいやしないか。」

「さうです、そして、最後にきくと、あの、一切合財みな煙り、といふ実にぞおとする、存在の底をゆるがして、くづれゆくやうな頹廢的な唄を口ずさむのです。」

「あいっだ、あいっだ。」村山は胸にこたへて、叫んだ。「おい、加野、用心するがい、その女がはらんでるといふのは、君の子供なのではないのだ。その実兄といふ奴は、ゴロツキだ。君は美人局にかゝっているんだ。実兄といふ奴は、その女の情夫で、腹の子供の持主なんだ。そこらあたりの初心な大学生共の間を、引きづりま

わいて、何んとかして誰れか一人をダマしてねじりつけるか、××のやうにくちゃ／＼に誰れのためにも共同便所となって腹の子供の主をこまかそうとしてゐる、僕等の間ではいゝ笑ひ者にしてゐる有名なノロマのゴロツキかもしれないよ。——俺が一度、君の宿へいって、その女の正体を見とゞけてやらう。仮りにそいつ共でなかったとしても、さういふキタナらしいすたれものを押しつけて、——君の子供でないことだけは、今の瞬間でもはっきり分る。安心するがい、——何も知らぬ書生から金をしぼらうとする奴は、立派に無頼漢だ。俺れが叩き出して赤いきものをきせてやる。——一度君の宿へいって解決してあげよう。」村山はなぐさめた。そして、二人の話にききいっている小春をかへりみて、「何んといったけな、あのイヤ／＼な世紀末的な亡国の唄を歌ってみせないか」といった。

「亡国の唄ってなあに。」

「船頭の歌、とかいふやつだ。」

小春は少ししよげて、三昧もとりあげずに、それでも、己とお前は利根川の船の船頭でくらすのよ、といふ流行のうたを不本意さうに／＼うたうたが、それは陽気で少しも、あの幽霊のやうな女の声とは似ても似つかなかった。

「ハッハ、君がうたふと、また異ってメーリイな円舞曲のコーラスのやうにもきこえるね。」

「だめ、そんな大道芸人の流行唄などうたはせては、」と小春は話の模様で、少し真面目になって、はじめて三昧をとり上げた。

## 三、

加野の下宿は、本郷千駄木町の裏通りの、彼れの友人で同じ塾の仏蘭西文学の教授の家に近い処にあった。

村山はその夕方、その女が加野を訪ねるといふので、午後、大磯山王の別荘を出て、加野の下宿を訪ねた。大学を出てまでも、未だ余りに簡素な、質儉らしい加野の生活ぶりは、村山に、成功者だといふ加野の父の厳格な節儉——さ細な経済的<sup>りんしゅくめい</sup>と、性慾<sup>マヤ</sup>のほけ場を、花柳の巷に求めることを知らぬ、いはゆるクリスチャン<sup>マヤ</sup>の偽善とが、かへって、さういふ死骸も同然の腐れ女に關係させて恐ろしい泥の中へ足をふみこむ過失をおこさせる原因であることを物語<sup>マヤ</sup>っているやうだった。

「いったい、どういふ工合にその女は、君を引っかけたんだい。」

「夜、夕食前後にやってきて、大い夕飯の御馳走になってかへるのだが、最初に關係した夜は、別にどういふこともなかったが、どうもへんてこでならないのは、自分で電燈を消して、わたしは暗いのが好きだ、などい<sup>マヤ</sup>「い」ふのです。何んだか、ぐちやぐちやで、膚はザラザラだし、僕はたゞ自分一人ではって、無我無中<sup>マヤ</sup>だったです。少くとも、私は、その關係によって、生殖を予想するわけにゆかない接触でした。」

「さういふことをきいているのではないのだよ、その女の君の引っかけ方なんだよ。」

「それは、イヤ—な歌をうたって、もうこのまゝ世界が終末であ

るやうな、毒蛇の匂ふやうな、気分で私をつゝんでしまつて、そのまゝそこへとけて消えるやうに打ったをれさせるのです。——そして、何故かしらんが、五円下さい。と帰り際にいふのでした。」

村山は不逞な、兄弟相応の畜生共が、塾に關係している名家の学生たちをつけねらうのみか、何も知らぬ、同郷の加野にまでつきまとっているらしいのにぶるぶるふるえて、思はず拳をにぎりしめた。しかし、もしかすると人違ひかもしれないといふ懸念で、彼れはその女の来るのを待ちうけてゐた。

一千九百二十一年十二月初旬の、雨が降ったり止まったりする夕宵のことだった。

「いつもの女学生の方がお見えになりましたが、お通ししてもいいでせうか。」

「一人でできていますか、(村山は親指をみせて) 男といっしょにきていますか。」

「男の方は何んでも外に待っていられるやうです。」

「ふむ、それなら、とにかく、通してくれ。」彼れは加野に代つてこたへた。

頼りのないやうな、足おとがして、襖をあげて背の低い袴をはいた「癩<sup>マヤ</sup>った女」がはいってきた。

そして、机の上に腰かけて、ぢろりにらみつけた村山を一眼みると、はつとしたらしく、その八畳の畳の上へ、べちゃんとはたばってしまった。

彼れは万一、人違<sup>マヤ</sup>いであつたかもしれぬといふかすかな希望の燐光が、その瞬間絶望的に絶滅されて、世界が、黑暗になったやうな



手いたいショックを受けて、さあっと蒼くなってしまった。

やがて、ぶるぶるふるふるえの出るのを我慢していたが、とうとう堪え切れなくなって、「おい、畜生、一切合財みな、煙りの歌を歌へ。」と口をきった。

その女は、実に絶望的にも、塾の学生達の宿を訪ねるのみか、彼れの宿へもやってきて、世紀末的な、天変地異の凶徴のやうな、イヤな頹廢的の歌をうたったその女であった。

「あなたは、何か人非人的な罪業に自分を苦しめているのだらう。」  
彼れはその時、一眼みると、その女を看破したのだった。「情夫といふのは、あなたの実兄のことだらう。」

さういつて村山はつめよせて、白状させた日のことを忘れるわけにゆかなかった。

「一切は決して煙りではありませぬ。あなたは、十七年アメリカの西海岸で×血をしぼられた吸殻の実兄に生血をすはれた吸殻であるかもしれぬ。あなたは逃避せずに、あなたが、実兄と関係した今日××の人類の意識では、畜生の所業としている行為の実行者で、その同情していへば、犠牲者であることを自覚しなくてはなりませぬ。しかしそれは、誰れの罪科でもないのです、あなたと、獣のやうなあなたの実兄との罪科なのです。罪が、当事者丈けの間で済んでゐるうちは、社会は何事も言はないだらう。少くとも今日の進歩したる階級は見てみぬふりをして鼻をつまんで通りすぎるより仕方がないだらう。しかし、あなたが、自分が畜生道におちているといふ醜劣そのものの権化となつてゐるといふ自覚をせずに、そのトバッチリを善良な健全な他人に引っかけるとき、その他人が善良で健全で

あればある丈け、黙つてはいない。制裁の鉄拳は醜劣なる畜生道に陥没してゐるあなた方兄弟の頭上へ下ることを覚悟しなくてはならない。今度丈けはゆるしてやる。自分の始末は自分でするがいゝ。それとも、兄と妹が肉交して子供を胎んでも天下に羞じることがないと思ふのなら、その哲学的根拠なり宗教的信念なり、科学的基礎なりを天下に公表して、堂々と自×の間を、兄と妹とがつるゝ、瀾歩するがいゝ、他人に迷惑をかけるのだけは止めるゝ」  
さういつて、村山はけがらはしき Old duck を叩き出したのであった。

「兄はわたし丈けではないのです。郷里の羽前大山にゐる妹とも、またひとりの実母とも関係してゐるのです。」ときくにたえぬ最後の白状をこの女は、彼れへたゞきつけて、去つたのである——  
「何も知らぬ加野君を、君達は、また、だましこもふとしてゐるらしいが、君等は生涯を煙りにしてしまつたコークスみたいな畜生族だらうが、加野君はやうやく大学を出て、これから世の中へ出て「て」ゆかねばならぬ、いはゞ、ダイヤモンドの一種だ。この世界を煙りと観するのは君等の勝手だが、何もしらぬ、加野までを、煙りの中へ捲き込「こ」もうと——」と言ひかけたが、すでに言説を超えて、彼等が性こりもなく、純真な青年を碍害して、すでに、現にその白紙のやうな清純の意識に拭ふ可からざる汚点を加へるのみか、現に、眼前にゐる女の腹の中の子供の持主なる肉親の兄が、門前に来て待つてゐるまでも、詩人肌で、クリスト教徒の教養をうけた加野へねじりつけやうと、脅迫してゐる事実と直面して、自分のことのやうに憤怒がわき立ってきた。

「おい、俺の顔に見覚えがあるか。」村山は、できるだけ憤怒を抑制して、言った。

女は案外平気で「あなたはどなたですか、存じません。」と言った。

恐らくとなり部屋まできこえたであらう音をさせて、園枝の頬を平手でなぐりつけた村山は、矢庭に、その Old duck のざらざらの、脂のにじみ出たくびすじを制えて、「加野、押入れの中の細引きを出せ。」と言った。

「細引きがないのです。」

「それなら兵子帯をかせ。」と未だに、こんなきたならしい女の前に、躊躇してゐる加野に焦々して、彼れは、叱りつけた。加野は、押入れから、蒲団を送る時の荷作りにつかったらしいつなぎあはした、兵子帯をとり出した。

村山は、その厚かましい獣女を、畳の上へうつむけにねじ伏せて、「この婆あ犬め、海老にしてやる。」と、両手と両足を背後へふんじばって、兵子帯でしっかりしぼりあげてしまった。

ふとみると、襖をあけて、ひとりの凋びた皮膚のたるんだ、中背の、古びた洋服をきた、一眼で、このきたならしい獣の兄で情夫だへと分る、四十近い男が、ひょっこり顔を出した。こいつだあ、と村山は直覺して、いったい無神経なのか、こちらを世間知らずの学者か大学を出たての書生っぽと見くびっているのか、こりしようもなく人間面をして顔を出した、男の厚かましさに、啞然として、彼れは、ふんじばった、獣女の背をどかんと足でふまえて、しばらくにくらみつけていた。

「お前か、この女の情夫は。」

「いや、私はこの女の兄です。」さういって、その四十男は部屋の中へはいってきた。

「お前の面の皮は、犬の皮でも張ってあるのか。」村山はどうぞうこらへかねて、平手で一つはりとばして、十七年アメリカの労働でこりかたまったわりに骨格のがっしりした、その男を、ねじ伏せて、ことによったら、彼れの方が危くなりさうになる体感を感じながら、「こいつは精神的節操と、思想と感情がめぐまれていれば、一種のニヒリストになるやつかもしれぬ。と瞬間ではあったが、買ひかぶって、どうにか、「海老」にしぼり上げた。

そして園江を仰向けにして、その上へ、うつむけにその畏るべき無茶苦茶者をかさねて、「おい、それほど肉親の妹や親と私通したことを、この東京中広告して歩きたければ、俺達の前で、してみるが、犬や猫は、親肉相姦をすることもあるが、少くとも他へ迷惑はかけないからな。——」

さういひ乍ら、村山は、彼等二人の皮膚がぶくぶくにふくれたやうにたるんでいた、ざらざら、きたならしい吹出ものが、かさぶたのやうに褪せてゐるのをみて、今迄、自分や加野の身辺へ直接ふりかゝる災難、被害としてそれを除去し征伐するのにきうであった心持ちに、事実を客観する余悠ができてくるにつれて、その心のすき間へ、あまりに、非文明的な、あまりにきいたことのないひどい、汚らしい事実から、「こいつらはもしや他の人々と公然結婚をゆるされてはいない東北未開の地方に凝集している人種のことになった部落の者共ではあるまいか、それでなければ、何か、祖先から伝統の

悪血をもつ恐る可き種族の者共ではあるまいか。」といふ疑念が湧いてきた。さうとでも考へなければ、これらの不倫、無智厚顔を、  
 解釈する道がなかった。「辻本君といふ司法事務官を君はよく知っているのか。」と村山は少し心配になってきた。<sup>ママ</sup>した。

「辻本君は、たゞ僕と科を同じくし役所を同じくしている先輩で  
す。」

「僕が、辻本君のお宅へいってもいいが、いっそ辻本君に、こへ来てもらって、一切を打ちあけて解決してもらはう。畏らく、辻本君も何も知らずに、たゞこいつらに、部屋を貸しているのだらう。」

——司法事務官にしては少し間ぬけ過ぎらあ。××烈日、厳正なる法典によって、この世の暗を照破すべき判官の身をもって、家庭内へこんなバチルス<sup>マヤ</sup>を養つてをくなんて、間ぬけすぎら。——もし承知で、何か、我々純である学徒の間へ、Spy としてはなっているのなら、それならそれとして、やはりマヌケ極まら。そののみか、もしさういふことで、捨てゝはをけない<sup>マヤ</sup>、社会綱紀の親害者<sup>マヤ</sup>であり、破産者だ。」

「辻本君の奥さんが、この女と同じ羽前大山の女ひとなのです。」

「それならば、ことによつたら辻本君は何もしらずに、そのもらいたての奥さんの言ふ通りになつてゐるのだ。」村山はやゝしばらく頭腦の澄むのをまつて考へた。「少くとも辻本君はこの女が、こいつと私通して、子供を胎んでいて、そこらあたりへねじりつけようと唾をはきかけて歩いてゐることだけは御存じないと見える。俺は、これから電話をかけてみる。」

と、村山は、階下へおりた。

## 四、

「あ、あなたは辻本さんですか、私はあなたの役所で、あなたの下僚として働らいてゐる司法官試験加野法学士の縁戚の、村山法学士ですが。あなたのお宅に林園江といふ神田の女子共立職業学校へ通っている女学生が下宿しているのは事実ですか。」

「左様、わたくし共は、妻の同郷の林園江といふ女学生を、あづかつてをります。」

「その方の実兄で榎家さんといふのが、見えてゐますまいか。」

「実は、その林相象と林園江の兩人が、司法官補試験の加野法学士を、兄妹相姦、懷妊にいたらしめ乍ら、美人局で、胎児を認知しろの、手切金を出せと脅迫して、いたので、今、直ぐ、ふんじばつて、これから、署までつき出しましたから、何分悪じからず。」

「――」事の突発的なのに驚ろいたのか、何かこたへる処があったのか、それとも無関心だったのか、辻本はさすがにこたへなかつた。ガチャリと受話機をおく音がひびいた丈けだった。

「これが、アメリカだと、こいつらは黒人共だ。東京中を引きつりまわして、日比谷あたりで、全市民とともに、たゞき殺してしまふこともできるのだが、――」

と、村山は不倫不義不遵の奴原に正義の制裁を加へ得ない平和な時  
機を××××××××××××××取りにがさないやうにと、たのんで、  
駒込署から出向いてくれた数人の刑事に、兩人を引きわたしたのだ

った。

「君は、役所を休んではいけない。下宿は、己れの処へ来ていて  
もいゝが、それよりか新婚間もなくで少し迷惑かもしれないが、黒  
田君の家へ宿をしてもらいたまへ。」

と言ったが、また二三日前の待合での、成人した素振りを考へあは  
せて「それにも及ぶまい。」と考へ直して、とにかく、今後つゝし  
まねばいけないことをくれぐれも忠告せずにいられなかった。

「女がほしくなったら、芸者に抱いてもらへ。深くなつてはいけ  
ない。身動きがなくなりかけたら、裸かどとび出してしまふが  
いゝ。」と言った。

## 五、

とにかく、一つの善事——といふよりも、泥沼へひきつりこまれ  
ようとしていた加野のために、掃除をしたといふはれればらしい意識  
で、大磯の王城山の別荘へかへってきた。村山を机の上に、雑誌や  
新聞と一緒に、「この葉書を受へけ」とつたものは、九人の友人へ貴下の  
幸福を祈る、といふ同文のハガキを出さなければ、必ず災禍がくる  
だらう。」といふ同文の葉書が数枚まつていた。彼れは、正座して  
しばらくそのハガキを見ていたが、この二三日来の忌はしい記憶が  
よみがへって、彼れはこの愚劣な迷信的流行をはじめたといふアメ  
リカの海軍将校を、Xするやうに、置火鉢の中へ、そのハガキ  
を引きさいて燃やしてしまった。

「どこの奴か分らぬやうな奴等の気まぐれなハガキの二三枚によ

って、この大地にしっかりと根を張った、現実の瞬間瞬間をふみしめ  
てゆく白日生活に、爪のあかほども干渉されたり影響されたりする  
わけはないのだ。こういふ不吉なハガキはX刑に処してやるのが一  
番だ。——用事もないのに、一時に九枚もハガキを無駄使ひすれば、  
もうかつてよろこぶのは通信省位のものだ。」

村山は、めらめらと赤い焰をはいて薄黄色の灰片になる幾枚かの  
ハガキをみつめてゐた。淡は白煙が一しきりしめきつた冬の夜の  
部屋を立ちこめた。

村山が倫敦へ発った少し前に、善良な淑女と結婚して間もない加  
野は東京地方裁判所の検事補に就任した礼をいつてかへった。

(をほり)

- (1) 注 清次郎の場合、最も目につく混同が「ある」と「いる」である。もっと  
も殆んどが「いる」と書かれている。
- (2) もちろん「J」とあるべきところである。以下同じ。
- (3) これで「うぶ」と読ませるわけであらう。
- (4) これも「うぶ」か。
- (5) 金沢出身(文久元・昭9・73才没)の政治家で、政友会の重鎮。大正七  
年文相、のち商相・内相を歴任する。
- (6) 前後から推して、あとから「園枝」の名を入れようとしたものであらう。  
なお後半では「園江」の名になっているが、時間を置いて書き継ぐ中で起  
きた不備かと思われる。
- (7) 「どうしようもない奴」ぐらいの意味で使ったものであらう。「duck」  
には「(修飾語を伴って) 欠陥のある人物」の使い方がある。
- (8) これは「きずつい」と読まずのであらう。

(9) この女の兄が「梶象」(しかもこの二人の姓が「林」で出身が「羽前大山」とあるところから、清次郎とわずか四か月の結婚生活を送った「小林豊」(明37―昭56・77才没／山形県西田川郡大山町大山に参拾四番地生)とその兄「小林相象」をモデルとして「煙」の書かれたことがわかる。

(10) いわゆる「船頭小唄」(大10/作詞野口雨情・作曲中山晋平)であろう。

(11) これは大正七年有楽座で上演された『カルメン』の劇中歌「煙草のめめ」(作詩北原白秋・作曲中山晋平)のリフレインの一部である。冒頭の二節をここに掲出しておく。「煙草のめめ空まで煙せ／どうせこの世は癪のたね／煙よ煙よただ煙／一切合切みな煙」

(12) 「りんしゆく」は「りんしよく」(吝嗇)を書き誤ったものであろう。

(13) この前後、きわめて書き加えの挿入が多く、そのため、必要以上に「読点」をつけすぎたきらいがある。

縁えん  
(小  
説)

嶋田清次郎。

藤沢の駅で、鵜沼にゐた時分何くれとなく案内してくれた一人の青年と、ビールとワインで簡単に、しばらくの別れをつけて、次の直通列車に乗り換えた時は、彼れを見送ってくれたものはこの青年丈で寒い寂びしい、暗らいぷらっとふおむには、彼れ一人しかゐなかつた。「京橋の兄さんとこも鵜沼の貸別荘もみんな焼けたりつぶれたりしちやつたあ。それでも四谷のおやじの「の」家が残つてゐらあ。——何に？ 妹はゐるよ。ゐたって、野島さんのやうに威張つてゐるものにくれるもんか。曰れは、南天堂の女給と結婚しち

まふんだ。」さう云ひ乍ら、青年は彼れの鞆を××へ運こんでくれた。「——<sup>マ</sup>已れ達は震災後公武合体論者になってゐるんだ。野島さんも早やく、いゝ令嬢でもさもらはなくちや、<sup>マ</sup>人が悪るくなくちまわあ。三等車にのってるんだもの。まさかと思つてあきれちやつたよ。——大阪に知つてゐる待合があるけれど、紹介はしないや。」翌朝、午前四時の未だ薄暗らい十二月の未明に、彼れは名古屋駅についた。郊外の×川に彼れの遠縁のものがゐないことはなかつたが、訪れる気になれなかつた。

旅館へついて、奥庭に面した二階の一室に部屋をきめて、七八年前に、故郷の市街の山荘の会合であつたきり××××××××丈けで会はずなかつた×××の女達に、手紙と迎への俤を差し向けるやうに言ひつけておいて、彼れは、明るくなるまで、眠つたのだつた。

友達の森井が鉄道の運輸事務所へつとめてゐる忙がしいからだで一日休んで折り目正しい着物をきて袴をはいて真面目に、×××すらと思ひ出したやうに降る淡雪の朝、寒さで頬を赤くしてやって来たのはもう、八時過ぎだった。七八×××にゐたやうな氣×××に、彼れは、兩戸をあけはなしたこの市街では一番だといふ旅館二階の大広間で、久しぶりに庭の老松にふりかゝる淡雪を肴に灘なだをくみかわした。

「少しはいけるやうになったのだね。」森井は七八年前と少しも変らぬ×××××さで、「頗る變った。何も××××××××××」。「日本酒はいけない。洋酒なら少しゆける。」

民造は未だ少年の時分、山莊に会合して、カアペンタアや藤村や啄木のものに就いて語りあった時分、森井が、×××××さもうまさ

うにちびちび酒をのむのを不思議に思ったことであつたが、今、どうにか盃を手にし得る自分を不思議に思はずにゐられなかつた。彼れは森井を前にして、森井達に別れてからの七八年間を考へると自分ながら、「はるばると来つるものかな。」と一種の詩人めいた感慨にうたれずにゐられなかつた。それは独逸にゐた時分、ハイデルベルヒの古城で、もと東大教授だつた某氏と語り明かした折りの感慨にひとしかった。たとへ、後者が空間の遥けさであり、前者が時間の遥けさであるとしても。

「名古屋には、今、誰れがゐるか知ら。」

「誰れもゐませぬ。××で、×田さんが来て講演をしてゆかれまして。」

「己れも一つ講演会をひらこうか。」

朝食を久しぶりですまして、二人はあらためて、この急な思ひ付きのやうな形式で、計画されはじめた「講演会」の準備をはじめた。森井はこの市街での大新聞社へ電話をかけて、彼れの来たことと主筆に会見したい旨を通じた。簡単な午飯をすまして、幾年ぶりで再会した彼れと、森井とは、薄っすらと日の射す、冬の午後の、平坦な、巾広い、平原の市街を歩いた。

## 二、

彼れと同郷のある大きな新聞社の主筆に、薄暗らい新聞社の二階で会つて、講演会の打ちあはせをしてから、彼れは、森井につれられて、「名古屋料理を味ひに」、小さな、しかし専門的な料理やへ寄

つたのである。

「震災後十年位ゐるは、日本の経済界は名古屋が中心になるだらう。」「民造は主筆の問ひに答へた。」「——震災の当時は東京にゐなかつた。信州へいつてゐた。」と、あの生涯に二度とない「経験」を、むざむざ口にするのがうるさくて、一×した。

料理やには誰もゐなかつた。七八年ぶりで、七八年前の、雪霰の降る日、藤村の「家」に就いて語りあつた記憶などを語りあふにふさはしかつた。ストーブに石炭を注いで、森井は、家のために芸術を断念してゐることや、役所づとめの苦勞などを語つた。「うむ、これはうまいものだ。」と微笑、風呂ふき大根を珍づらしいものとして味つた。彼れは、そこへ訪ねて来た新聞記者から、故郷を同じくするある仏教家が、講演の旅にきてゐることも聞いた。——雪がちらちらと降りはじめた。×と×のこみ入つた、平原の市街を二人は、灯びの明るい市街の中心へと歩いた。

「御園座へ寄つてみよう。」御園芸者の舞踊のお習ひがあるといふことだつた。

## 三、

舞踊はもとより、彼れにとって「見られる」ものではなかつた。舞踊や演劇の Expert が研究するやうな義務と責任はもたなかつたが、三年余の欧羅巴の旅は、彼れに露西亞や端西の踊りや、独逸や仏蘭西や伊太利の音楽に、自ら親しませてゐた。彼れの眼は舞台を見るよりも、棧敷の上から、着飾つたこの平原の都市の美しいひと

の上にそゝがれずにゐなかった。

舞踊ぶろぐらむの中ほどまで進む<sup>マツ</sup>頃だった。直ぐ彼の傍の×棧敷に、未だ十四五の背の高い雛奴と、二人きりで大人しやかに、熱心に舞台をみつめてゐる、どこか見覚えのあるひとりの二十歳あまりの芸妓が、しきりに彼れをみつめてゐるのが分った。彼れは彼れの残の記憶をさかのぼってみるが、もとより名古屋に知ってゐる妓のゐやうはづはなかった。彼れはいぶかしげに、時々、その輪郭や骨格の繊細で柔軟かではあるが、男前の、押出しの立派な姿を見つめた。

「あの。」ふと、自信づいたやうに、蒼づんだ立派な美しい顔に微笑と親愛と回顧の波がゆれた。結びたての大がらな銀杏の髪の毛の造りが、触れて絶縁されてゐた世界を揺曳<sup>マツ</sup>させる。「野島先生ではいらっしやいませんの。」

彼れはそこに、やうやく、四年前の下谷の八千代子を見出さねばならなかった。

「どうして、名古屋にゐるの。」

「家はすっかり焼けちや<sup>マツ</sup>ったのよ。」彼女は、知らぬ他郷にゐる淋しさと気づまりから解放された瞬間的な情緒を、×付いた。いつも沈んでゐるやうに見える冷めたい彫像のやうな態度をくづして見せるのだった。「でも、御無事で御帰朝になって、何よりでございすわ。」彼女に四年前の彼れや彼女のことがよみがへるらしかった。彼女は、彼につゝましい彼女にかへって「久しい振り」の酒を継<sup>マツ</sup>いだ。

「あなたと、N君がゐた時分、よく踊りの議論をしたっけね。あ

なたは、おる乃と手ひどい西洋舞踊の攻撃者だったぢやないか。」

「それは、今だってさうなのよ。」彼女は面<sup>おもて</sup>を伏せた。彼れは、若柳流の彼女の踊姿の凛々しさを、よく日本橋倶楽部のおさらい<sup>マツ</sup>に見たことを想ひ出した。

「いつ東京からこっちへ来てゐるの。」

「家の者が、一家をあげて来てゐるの。」

彼れに舞ひが見てゐられないやうに、彼女にも事実見てゐられないらしかった。

「外へ出ようか。」「えゝ、そこまで、お供しますわ。」

木××屋の出口に薄っすらと化粧をし直した彼女が見×つてゐた。

#### 四、

人と人の関係ほど不思議なものはないと彼れは考へずにゐられない。

彼れが、欧羅巴への旅に出ねばならなくなった、その準備に急がしかつた時分、その頃「大観」を主筆してゐたNが、彼れの外遊費の調達に可成り好意をもつて奔走してくれたものである。それは、大隈侯がなくなつて間もない時分であつた。<sup>(2)</sup>

彼れは成功のお祝ひに、一夜二人きりで語りあかすことにして、その座席を×××××に決めてを<sup>マツ</sup>いた。

Nは、現に彼れのために外遊費の調達に骨折り乍ら、彼れの外遊を止めさせようとした。

「大隈さんが生涯洋行されなかつたのは、洋行してゐる間に自分





「紳士諸君。」彼れは低い声ではじめた。「人と人の關係ほど不思議なものはないと思ひます。ごく何んでもないことですが、よく私共は「縁えん」といふことを言ひます。毎日××してゐることが必ずしも縁があるといふものでなく、ほんの淡い、はかないほど、一度か二度の接觸でも、それが人の魂にふれる時、私共は、縁がある、縁えんが深い、と申します。今夜は、ここに見える悠々先生の御招待で諸君に見える機會を得ましたが、十年前に田舎にゐた時分、わたしはこの悠々先生の主宰される新聞へ百円の懸賞金が欲しくて一篇の論文を投書したことがあります。また、その時分、わたしの思想上の母となつて下さったのが、ここにゐられる暁鳥師であります。またその時分、わたしと共に、君と別れて松原ゆけば松の露やら涙やらと唱はれたのは、ここにゐられる成瀬師であります。昨夜、みなさんも御存じと思ひますが、この都市での作家である森井君——十年前同君が酒をのむのをみて不思議に思つたものですが——につれられて御園座へいって、ほんの一度か二度呼んだことのある××八千代子といふ娘に会ひましたが、これなども、考へてみれば、ずる分アツクと縁の深い方と思ひます。

「紳士諸君今、不意に諸君によって×題された故大杉栄君はどちらかといへば、わたくしにとっては縁の薄い、縁の無い方だと思ひます。故大杉君が、日本有数の無政府主義者でサンジカリストであることは、きいてゐましたが、同君をはじめて見たの、今は、震災でなくなつてゐますが、日本橋の日活会社事務所の近所に紅べにやといふコーヒ店があつた。そこで、荒川義英といふ不幸な一人の青年の××が出版された追□と祝賀の会がひらかれたことがあります。それ

は大正九年の冬の夜で×××××、飯坂君もはれて出席しておりますが、あの巨きな瞳の円顔の大杉君をはじめて見たのです。わたしはその時同君から一本の両切りの、その時分見たこともない舶来の上等の蓑を一本もらひましたが、今から考へると、それは、同君が肺患にかゝつてゐられたからか、××、××して××××氏が「Japra」<sup>(5)</sup>にかゝつてゐられたせいではなかったかと考へられます。

その次にわたしが大杉君をみた××××××××××××××××××  
××××××××××××××××××時であります。わたくしは賀山と  
いふ人はどういふ人かと思つてききに出かけましたが、その時、わ  
たしのあたつてゐるストーブの向ふ側で、トルコ帽をかぶつてオー  
バーに腕も通さずに立つてゐられたのが大杉君でありました。同君  
は賀山君の何かについて筋鳴りはじめたが、賀山が演壇で立往生を  
してしまふ。「質問の自由位ゐあつたといふぢやないか。」さうい  
つて同君は演壇へ近よつて、賀山君の演壇を占領する。賀山君が演  
壇をゆづる。聴集が総立ちになる。同君がそれを鎮める——といふ  
まことに他愛もない一幕を見たわけであります。次ぎにわたしが同  
君をみましたのは大正十年の春改造社の招待で帝劇へいった帰りで  
す。わたくしは同君が暗い顔をして帝劇の廊下の片隅みに、野枝さん  
と二人でおられるのを見ることがあります。その時の暗い表情は、  
同君の「己れは監獄でできた人間だ」といはれた×××を裏書きする  
やうにも思へました。——わたくしが外遊直前に鵠沼にゐりました時  
分、雑誌記者の一友人と鎌倉に同君の邸宅をたづねたことがあります。  
この雑誌記者の話では同君の声名は、確実に馬丁の徒にまで及  
んでゐるといふことでありました。わたしは大正八年の秋民人会の

小林輝治

大会の席上で大杉君と野枝夫人をみましたが、鎌倉の未だ新築の木口の立派な、大邸宅に、同君をたづねて、当時のわたくしは大へんうらやましく感じたことを覚えてゐます。また、その時野枝さんが、玄関にあらはれて、普通のあの程度の家に住む家庭の主婦ならば、玄関にすわって夫の在否をこたへるべきであると思はれますが、襖にもたれて立ったまゝで、大杉は東京へ出かけました、とこたへられたのを覚えてゐます。野枝夫人が、あまり評判のよくない女性でゐられたのもさういふことが原因しないかと思ひます。又、大杉君の自叙伝によりますと、同君は今の内務大臣後藤新平君から、三百円か五百円かを困った時に貰はれたといふことですが、これなども、青年会館でみた同君の態度から思ひ合はせますと、わたくし共思想や自我の××に生活の×××の率を高くおくものにとつては、ずい分と深き省察を与へるものと思はれます。

「飯坂君はじめ三十余名の人々は今、牢にゐるとききます。わたくしの留守中に飯坂栄子さんもすでに牢へはいつて出て来てゐるとききます。——それやこれや思ひ合はせますと、わたくしは「縁がある、縁がない」ということ、「縁が深い、縁が薄い」といふことをしみじみと味はさせられるやうに思ひます。昨夜も八千代子の江戸前の踊りをみて、よみがへったやうに思つたことですが、亡くなつた大隈さんには一度会つてゐればよかった思ふのです。

「名古屋はどこにかといへばわたくしにとつては縁が薄い土地ではないかと思つてゐます。日本へかへる船中で、この師団の騎兵聯隊長をしていられる伯爵とも同船しましたが、同伯爵にはドオヴァ海峡をこえる時はじめて、お目にかゝり欧羅巴の各地で回遊しま

したが——白状すると、わたくしは、船の中で、名古屋に日本におけるわたくしの永住の地を決めようかとも考へたことがあるのです。

——」

彼れは、それで止めた。

六<sup>(6)</sup>

翌年正月廿七日の朝、大阪からふたゝび名古屋をたづねた時、その夜の主催者だった成瀬は、彼れに、熱い乳風呂をたてゝもてなした。そして湯上りの彼れに血のやうに濃いココアをすゝめた。

「どうしてそう大人しくなつてしまつたのかな。もう少しあばれなくては損ぢやないか。日本全体が君の味方といふわけでもあるまいが、敵ばかりゐるわけでもないぢやないか。」と、彼れに lecture をすゝめた。彼れは答へなかつた。

八千代子に電話をかけたが、もう東京へ帰つたといふことだった。  
縁。

、停車場のとなりのソファにゐた娘

ちらりとなげた眸の色は

真実いとし身も細る、

彼れは成瀬に示して微笑えみあつた。硝子ごしに日が映つてゐた。

一九二五年五月十日

(をはり)

## 注

- (1) 「おの」のルビは次に「ずか」が落ちている。
- (2) 大隈重信（天保9生）は大正十一年一月十六日に八十六才で没。清次郎の外遊は、この三か月後四月に迫っていた。
- (3) 以下、この章の終わり「名古屋に日本におけるわたしの永住の地を決めようかとも考へたこともあるのです。——」までが民造のことばである。したがって、この間の「」は、普通ならすべて「』」とあるところである。
- (4) 「まみえる」と読ませるつもりか。
- (5) 「lepra」（癩病）の誤記であろう。
- (6) ここには「読点」が、他の章のようにつけられていない。